

国文学研究資料館報

第14号
昭和55年3月

芸能資料と国文学研究資料館

室木 弥太郎

疎外される文献

芸能という言葉はあいまいで、雅楽・能楽・狂言・文楽・歌舞伎・舞踊・狹義の邦楽(三味線曲・浄曲)・歌謡・民俗芸能(神楽・田遊・風流の各系、その他)・口承文芸・演芸(落語・漫才・漫談・講談・浪曲・曲芸・手品等)それに声明・平曲・節談説教、さらに茶・花・香の芸事、料理・相撲等と切りがない。しかし国文学の範囲でいえば、謡曲・狂言・浄瑠璃・歌舞伎脚本といった劇文学を初め、語り物、あるいはそれを素材にした作品、各時代の歌謡などが入るが、能楽論・役者評判記のような、芸能特有の文献も無視できない。

右のほかにも、やはり文献資料として、この領域の歴史的研究に欠かせないものがある。オーソドックスな歴史の資料と重複するが、芸能独自のものもある。滋賀県のある神社に、説経関係の資料(ほとんどが文献)を所蔵している。最近二十年ぶりに見たのであるが、前に見なかったものもあり、勇を鼓して翻刻を思い立った。宮司さんのご好意もあり、何より有能な協力者を得たので、ここ三年ぐらいうちに完成したいと思っている。次第に虫食いがひどくなり、鼠のおしっこか何かで汚損して、読むだけでも容易でない。それに目を驚かすような資料でもないから、一枚一枚時間をかけてめくるうちに、ついため息が出てくる。

先日もある古書店の目録に、江戸の三町年寄・芝居役者座本・新吉原町・長吏彈左衛門の由緒書(墨付五十二丁)が十万円と出ていたそうである。それに比べると、右の古文書は数百万円はするだろう。しかし値段の問題ではなく、掛け替えのない品物であるから、段々朽ちていくのが惜しいのである。裏打ちをしたらと忠告する研究者もいるそうである。しかし宮司さんには失礼な言い方であるが、明治神宮や住吉神社ならいざしらず、このお宮さんでは、十年分のお賽銭を注ぎ込んで、それはできないだろう。翻刻を決心したのには、補修の必要なことと言うまでもない。

お寺は所蔵の書を内典と外典に分け、後者はそんなに扱いはよく売りに出す。芸能関係の資料も外典に相当し、尊重されることが少ない。また芸能の家でも、先祖を尊くした系譜とか、自家を顕彰する由緒書の如きは、比較的残るが、名譽とは思われない文書は、さつさと捨ててしまう向きがある。

以前舞々関係の資料を求めて、福井県を歩いたことがあるが、舞々の子孫に当る、あるお宅では、伊勢暦のみが大切に仕舞われ、ほかには何も残っていない。恐らく江戸時代には転業し、多分土御門家について暦を売っていた名残であろう。それ以外にも資料はあつたに違いないが、ぜひ保存しようという意欲がわかなかったのであろう。芸能者に共通する身分上の差別から、自分の職業を否定する気持が作用したのかもしれない。

右の神社には、説経の者に送った手紙(説経者にとって面白くないものが多い)の控が残っているが、今仮りにその子孫が居られるとして、

芸能資料と国文学研究資料館

室木弥太郎 1

一 次 『瓦解集』のこと……………徳田 武 2	情報・蓄積検索システム見聞記
二 第三回国際日本文学研究集会……………古川清彦 4	文献資料部事業報告……………大久保正 10
三 奈良絵本国際会議……………本田康雄 5	研究情報部事業報告……………古川清彦 11
四 韓国日本学学会……………古川清彦 5	整理閲覧室事業報告……………本田康雄 13
五 秋のイタリア……………福田秀一 6	共同研究・評議員会議……………15
	昭和五十五年春季学会開催一覧……………16

その手紙を保存しているとは思われない。自分に不都合なものは、成るべく捨てるのが人情である。芸能の家には、あつてほしいと思う資料がほとんど残らないのも、右のような理由がある。従つてわずかに残っているものでも、これを大切に保存する必要が、今あるわけである。一つしかないというものは、二級品でも三級品でも、その保存には手を尽すべきである。芸能資料には、そういう下級品と見なされるものが多い。しかし御宸翰とどちらが値打ちがあるかということになると、一概に言えないものがある。

資料館に工房を

先般国立公文書館で、虫食い文書の、裏打ちと製本の実演があつた。専門家がすらすらとやっているのを見ると、自分もやれそうに思うが、やはり相当の修練が必要だろう。虫食いや湿気で固まつてしまったのを、一枚一枚解きはぐして、裏打ちをし、物によっては製本するという、これだけのことが、安価に、素人にもできるということがあれば、芸能資料に限らず、本館が目指す、文献の保存に、大いに役立つだろう。そういう技術者を養成し、技術の開発・普

及、あるいはサービスということをして、本館ができるようになれば、一方で目指している、文献の収集(原文献を集めること、あるいはその写真を撮ること)に、必ずやいい影響を与えるであろう。

古書店の目録に載るような、高価な本は、どこに所蔵されても大事に保存される。しかし他方に、所蔵者が持て余している文献も大量にある。それは砂ばかりではなく、金も銀も銅も混じつている。また砂と思つていたものも、いつ金にならぬとも限らない。本館は近い将来、そういう反古買ひも始めるべきではないか。それには、右の補修・製本の専門家とその仕事場(工房)が必要になる。芸能資料を考える場合、文献のほかに、当然映像と音声の資料が問題になる。久松先生は「国文学の研究資料は文献だけでなく伝誦されたものもあるから将来は伝誦されたものも録音で集めることも考えられる」(館報第一号「設立をよろこんで」と言っておられる。特に民俗芸能は観光のために変更を加えられることが多いが、そうならないうちに早く記録した方がよい。例えば能登一の宮氣多神社では、今も毎年鶺鴒が行われている。これは謡曲「鶺鴒」の

素材になるもので、ぜひ映画に撮っておきたいものの一つである。

そういうものは沢山あるが、これを直ちに本館に期待するのは無理だろう。第一にそういう準備ができていないし、それに当面の仕事(例えば文献の大量撮影)が大切である。しかし文献・資料の調査・収集、あるいは保存といつても、本館がすべてをやるのではなく、またできもしない。ほかの機関ではできない仕事を選び、結果的には相互補完の実を挙げたらよい。それが独自の事業であり、特色であると、本館の将来像をそんなふうと考えている。

今は図書館でも個人でも、所蔵の貴重書を保護するため、閲覧の禁止あるいは制限をしている。この傾向は、急速にどうか徐々にどうか進行し、今後あと戻りすることはないだろう。従つて本館は大方の協力を得て、できるだけ早く、できるだけ多く、主要文献の撮影をするのが急務である。それは所蔵者にとつて

も好都合であり、研究者にとつても好都合であるはずである。この点の相互理解がまだ不十分なところがあリ、いろんな機会にその努力が必要になろう。

これは将来への期待であるが、国書総目録に載つていない文献、中でも疎外されている文献は、相当な数になろう。あちらに一点、こちらに一点と散在しているものが多いだろう。それを丁寧に収集するには、本館専任のカメラマンが欲しい。撮影の前に、破損しているものは修復しなければならぬ。その技術者が必要だ。久松先生が言われた、録音の仕事もある。そういう職人ともいえる専門家が、共同で仕事のできる工房も将来は設けるべきではないだろうか。適任者さえ得られるなら、本館の事業の中でユニークなものになり、本館に対する信頼を一層高めることになろう。

(国文学研究資料館第四文献資料室(客員研究室)教授・金沢大学教授)

『瓦解集』のこと

徳田 武

五十四年度の第四文献資料室の非常勤講師として、資料館に一年近く通った。与えられた任務は、日本漢文学、特に近世日本漢文学関係の文献の調査収集というものであったが、実際はあまりお役に立つほどのことはできなかった。ただ、側聞傍観ではあったが、館のマイクロフィルム収集や収書程度、機構、それに教官諸氏の御苦労の一端は窺うことができた。

その内、任務と直接関係する収書の程度については、日本漢文学に関するかぎり、館の収書量は甚だ少ない。おそらく、国文学全体の中で最も収書量の少ない分野の一つといえよう。だが、その事については報告（『調査研究報告』文献資料部）に書いておいたから、ここでは触れない。そのような僅少の資料の中から、私は一つの珍しく、興味深い本に出会うことができた。

題して「瓦解集一名関東邪氣集」という。書庫内を漫遊していた時、私は帙の背に貼付されているその書名を見ただけで、早くも心が魅かれた。何がくだけるのかは知らないが、瓦解とは、私の内にある破壊するものへのロマンティズムをちよつとそその題名である。そして、そ

れに続く副題がまた異様に官能を刺激するものである。関東とは何か、また邪氣とはいかなるものか。

本書は、中本型で全二十五丁の小冊。明治九年八月二四日に版權免許を受けている。出版人は東京府平民東生龜治郎。内容は、輯録者の三重県士族三毛證が叙で語る所によれば、「関東・奥羽等ノ諸藩士ノ作ル所ノ詩若クハ国歌（原漢文）を輯めたものである。すなわち、瓦解とは、王政復古・大政奉還によって潰滅した徳川幕府をいつたものであり、関東とは、佐幕側の直参、関東・奥羽諸藩の人士を指す語であった。

三毛證はさらにいう。かつて「防長正氣集」を見たところ、周防・長門の人士は玉の如く、その作る詩は金の如くであり、その名声が千載に残るのはまことに尤もである。それに対して、本集に収める人士は、みな「方向ヲ誤リ、王師ニ抗ガフ」ものであり、その罪悪はもとより王法によって誅罰さるべきものである。したがって、これを「関東邪氣集」と称して、少しもおかしくない、と。邪氣の意味はここにおいて判然とした。時代の大勢を誤まり、官軍に抵抗した邪悪の徒を指すのである。だからといって、三毛證が関東

の人士を否定しているというのでは勿論ない。そもそも、幕府側人士の詩歌を輯めるといふこと自体が滅亡した幕府へのシンパシーを表わしているのだが、三毛證の「蓋シ其ノ跡逆ニ渉ルト雖モ、而モ其ノ忠ヲ其ノ事フル所ニ尽ス、其ノ志亦タ哀ムベシ」という言葉もそうした心情を自ら語っているわけである。とすれば、邪氣とはいっても、関東人士の行動は忠という武士道徳から発せられたものだから、それは絶対的な邪悪ではない。ただ、官軍の側からいえば邪氣になるといふ、相対的な邪悪である。

いうまでもなく、戦争とは双方に大義名分があつて行なわれるものである。甲・乙の甲にだけ大義名分があつて、乙にはない、といふことはあり得ない。たとえ乙に大義名分がなかつたとしても、それを造りあげてでもして、自己を正当化してから行うのが戦争というものである。だから、甲と乙は、それぞれ自己を正義と信じているわけである。そして、双方の大義名分のいずれが正義であるかは絶対的に公正で客観的な価値基準によって決められるのではなく、結局勝者の手によって定められる。敗者の大義名分はいつても邪

悪と見なされるのである。勝てば官軍とは、このことであらう。この意味において、甲と乙との大義名分は相対的なものであり、善悪邪正は常に逆転される可能性を秘めている。もしも幕府が勝者であつたならば、正氣は幕府になるものであり、邪氣は防長になるのである。かような認識法を三毛證は十分に心得ていた。したがって、三毛證は、幕府側を真実絶対の邪氣と信じていたわけではない。むしろ、邪氣は、徳川三百年の太平の恩沢を裏切つた防長側にある、とひそかに信じこんでいたかもしれないのである。とすれば、「関東邪氣」とは、関東を憎むあまりの悪口ではない。うまくすれば正氣になつたものが敗れたために賊軍とされる、そのドチかげんを自ら嘲り、自ら罵つた言葉である。すなわち、「関東邪氣集」とは、自らの失行をもう一人の自分がいたぶる自虐的・自嘲的精神がこめられた名である。私が書名に魅かれたのは、そのような自嘲的精神を初めから漠然とはあるが感じ取つたからのものである。

作品が収録されている人は、榎本武揚・大島圭介・永井尚志・人見勝太郎および会津藩・仙台藩・高田藩

などの函館五稜郭の戦争に参加した人々、また雲井龍雄・勝海舟・川路聖謨・成島柳北・依田学海等の幕臣及び幕府側の人士であり、最後に三毛證の詩二首が収められている。それらの中から二・三の作品を拾い出してみよう。

有感時事 榎本和泉(武揚)

熱闘名門悉倒戈 熱闘名門 悉く倒戈

祖宗百戰奈山河 祖宗百戰 山河ヲ奈セン

誰國開化文明日 誰カ國ラン開化文明ノ日

翻見乱臣賊子多 翻見テ乱臣賊子ノ多キヲ見ルトハ

大義名分の相対性ということを前述したが、この詩の転結二句にはそれが端的に表現されている。徳川の始祖が幾多の戦争によつて勝ちとつてきた山河は、むなしく薩長側に奪われて、国民の誰もが文明の恩恵に浴する開化の日がやってきた。ところが、世の中が良くなるはずなのに、政府にはいたずらに乱臣賊子がいびこり、維新前より乱れた状況を呈している。薩長からいえば、武揚は明治政府確立後もなお反政府運動を行っている存在であるから、乱臣賊子の最たる者に違いない。が、武揚からいわせれば、薩長藩閥こそ徳川の治政と恩沢に背いた乱臣賊子なのである。倒幕に成功したが故に正気とされる薩長は、まさにその故を

もつて邪気と見なされる、という大義名分の相対性。武揚は、この大義名分の相対性を利用することによつて、現実世界においては敗者の自己を倫理世界における勝者に転化しようとしている。そして、こうした心的態度が、「関東邪氣集」と銘打つた三毛證のそれと大層近いものであることは、もはやいまでもあるまい。もう一首、成島某の「己巳元旦」をあげよう。

大政一新誰亦新 大政一新 誰亦タ新タナリ
京城士女競迎春 京城ノ士女 競ッテ春ヲ迎フ
吾家别有淵明柳 吾ガ家別ニ淵明ノ柳有り
遮断東風不到身 東風ヲ遮断シテ身ニ到ラシメズ
成島某とは、明治元年に隅田川畔に移居し、陶淵明に倣つて松菊を裁した柳北のことに相違ない。五柳先生に倣つて、薩長の田舎者が壘断する俗世を避けた柳北居士は、その柳を楯とすることで薩長人士ののごしている都下の風をわが家に入れまいとしているのである。結局はいかにも都会の粹人風の隠微な表現ではあるが、反幕側の人士への嫌悪感を鮮明に浮き彫りしている。

ところで、柳北は同日に次の和歌をよんでいる。
朽はてし賤が軒ばの梅が枝に
昔ながらのはる風ぞふく

前の詩と同じく東風をよんだものであるが、同日の同じ風であるのに、一方はそれを厭わしいものとし、一方は好ましいものに転化している点が甚だ面白い。同一の風であっても、徳川の御代をしのびせる風と観ずるならば、それは慕わしいものであり、薩長の塵埃を吹きよこす風と見るならば軒先にも吹いてほしくないものなのである。風一つに対しても、柳北の心は過去と現在の間を様々にゆれ動いている。

近世文学史の内に幕臣の文学が組

学助教授)

第三回国際日本文学研究集会

一九七九年十一月十五・十六日の両日、国文学研究資料館主催の第三回、国際日本文学研究集会が開催された。

今回は地方からの出席者の便宜も考慮して第一日の午後から開会し、会議録(15頁参照)に示すように、二日にわたつて六つの研究発表と、シンポジウム「民間伝承(フォークロア)と文学」が行われた。企画にあつた委員会(委員長井本農一)には従来の委員のほか、エドワード・サイデンステッカー、コロンビア

みこまれていないのは、嘆ずべき状況であろう。幕府の遺臣の文学も柳北や栗本勘雲を除いては、殆ど顧みられていない。『瓦解集』は、小冊ながら、以上のように屈折に満ちた遺臣たちの心情を窺わせる好資料であるが、これまで言及された例を私は寡聞にして知らない。あえてこの欄を拝借して館蔵の資料を紹介する所である。

(国文学研究資料館第四文献資料室(客員研究室)非常勤講師・明治大学助教授)

大学教授が当館の客員教授であつた期間(一九七九年八月十五日まで)委員として参加された。

研究集会参加者は九十三名、うち海外からの参加者は三十一名であつた。研究集会の概要は次のとおりである。

長谷川泉氏(学習院大学)司会の第一セッションでは鄭清茂氏(マサチューセッツ大学)の「日本の近代文学と中国作家」、張良澤氏(筑波大学)の「戦前台湾における日本文学

「西川満を例として」という東アジアの中の日本文学という国際研究集会にふさわしい発表が行なわれ、張氏は、鄭氏からの質問に答える中で、かつて高校生だった頃、鄭氏の日本文学の本を載いたことがあり、はからずも二十数年ぶりの再会であるというエピソードも明らかにされた。また張氏は戦前台湾で出版された『臺灣風土記』ほか二十数点を展示され参加者の関心を集めた。

第二セッションは、ドナルド・キーン氏（コロンビア大学）の司会により、ケネス・リチャード氏（トロント大学）のフランス構造主義の手法による日本古典の分析という新しい試み、中村哲郎氏（演劇評論家）の西洋人の歌舞伎評価に関する発表

奈良絵本に関する国際会議

奈良絵本の多量のコレクションがダブリンのチェスタ・ビート図書館にあることを発見したのは、米国のバーバラ・ルーシユ女史である。

女史の精力的な活動により奈良絵本に関する国際会議が一九七八年にダブリンとニューヨークで開催され、日本からも当館市古貞次館長ら文学

があり、エーゼンシュタインの映画への歌舞伎手法の導入をめぐって参加者と意見の交換も行われた。

二日目の午前は、池田重氏（千葉大学）司会のもとに、ジャーニン・バイチマン氏（上智大学）と、鶴田欣也氏（プリティッシュ・コロンビア大学）両氏により、それぞれ近代の子規、康成に関する発表が行われた。

午後のシンポジウムは、臼田甚五郎氏（国学院大学）の司会により、三隅治雄氏（東京国立文化財研究所）リチャード・マッキノン（アジア芸術センター・ワシントン大学）の発表を中心に伝承と創造の関連をめぐって討論が行われた。

（情報室）

・宗教・美術にわたる多数の研究者の参加を得て成功裡に終了したことはテレビのニュースなどでも知られたところである。その続きとしくめぐりとして一九七九年夏に日本で会議が催されることとなり、八月二十日に当館、二十四、五日に京都の京大会館で会議が、関連して国内および

び在外の奈良絵本の展示が東京サントリイ美術館（八月七日から九月十六日まで、在外本の特別展示は十四日から二十六日まで）、京都思文閣美術館（八月二十九日から九月十一日まで）在外本のみ展示）でなされ、公開講演会が東京と京都で行なわれた。うち、当館で開催された会議のメンバーと、発表題目を記す。

- 参加者（日本）赤井達郎・五来重・市古貞次・松本隆信・宮次男・岡見正雄・阪倉篤義・佐竹昭広・信多純一・反町茂雄・辻惟雄・田中文雄・徳江元正（ABC順）
- （海外）ガードナー・村瀬・セーヤー・ミルズ・カンタ・アラキ・ブツシイ・克蘭ストン・ビジョー・チャイルズ・マティソフ・メイソン・ルーシユ（順不同、姓のみ）
- 発表題目
- 奈良絵本私考 反町 茂雄
- ケンブリッジ大学アストンコレ

韓国日本学会

韓国日本学会（李栄九会長、ソウル特別市冠岳区大方洞三九三六〇）主催の第六回国際学術発表会が一九七九年九月二九日(土)にソウルの檀国

クシオン所蔵の絵草子・絵巻二、三点について D・ミルズ 幸若の詞章から見た海外の奈良絵本 田中 文雅

「むらまつ」絵巻のテキストの問題について 信多 純一

絵物語の地獄巡りと地獄破り 五来 重

役行者の物語絵巻について

A・M・ブツシイ 右につき熱心な討議が行なわれた。会議終了後、当館市古館長主催によるレセプションが当館で行われ、会議メンバーの他、在外所蔵者側のランキン・ヘンチ夫妻・潮田の各氏など五十名ほどが参加した。

なお、この会議はメンバー制による非公開のものであるが、発表および討議の詳細は近く三省堂から、また在外資料の主要なものは角川書店から刊行される予定である。

（東京会議幹事 村上 学）

古川 清彦

大学校（龍山区漢南洞）で催され、国際交流基金の業務委嘱で東大の小山弘志教授と私が招かれ参加した。共同シンポジウム（テーマ「日本文



熱心な態度で、総合討論(一五・〇〇—一七・〇〇)も活発であった。

韓国における日本研究は戦後の長い睡眠から次第にさめて新時代を迎えている。韓国日本学会は一九七三年二月に設立され、各分野の日本研究者に組織的な計画を進める画期的なチャンスを与えた。学会の活動は広範囲に及び、セミナー、国際研究会の開催、「日文学報」の編集などが重要なものである。日韓両国は地理的ばかりでなく政治的経済的にも関連がある。韓国には日本語の判る人が多数存在するし、日本語を理解する若人も育ちつつある。過去の一時的中断にもかかわらず、戦後の世代は日本を一つの外国として冷静に学んでいると韓国日本学会は判断しているようである。

学の特性)における講演を頼まれたのである。準備委員は李栄九(崇田大)、韓基彦(ソウル大)、黄明水(檀国大)、朴洋根(慶南大)、宋敏(聖心女大)、金恩典(ソウル大)、金鍾学(中央大)諸氏であり、当日の進行司会は孔徳龍(檀国大)氏で、総合討論(自由質疑)の司会は韓基彦氏であった。発表(九・五〇—一三・一〇)は、

- 1、日本自然主義的特質—エミール・ゾラと対比して

鄭明煥(ソウル大)

- 2、森鷗外と詩歌 古川 清彦
 - 3、謡曲の文章 小山 弘志
 - 4、日本詩の伝統とモタニズム詩運動 金恩典(ソウル大)
- という順であった。参会者は百人、

の文化と風物は私にとって印象深く有益であった。

(研究情報部長)

秋のイタリア・ドイツ

—ヨーロッパ日本研究協会第二回大会に参加して—

福田 秀一

謹啓

歳末多端の折柄、遙かドイツの地より謹んで御挨拶申し上げます。

扱、学術研究の諸分野に互に互に米諸国の多大の関心が日本に寄せられております現今、当ヨーロッパ日本研究協会におきましては、来秋、昭和五十四年九月二十日より二十二日までの三日間、イタリヤのルネッサンス発祥の地フィレンツェにおきまして、第二回国際会議を開催させて頂くことに決定致しました。

(原文のまま)

こういつた書出してE A J S (The European Association of Japanese Studies)の当時の会長モーゼフ・クライナー教授(ボン大学)からその

第二回大会に文学部会の「来賓講演者」として参加するよう招請を受けたのは、一昨年の暮であった。一九七三年に発足して有意義な活動をしているE A J Sのことはかねて聞いていたし、殊に一九七六年の第一回チューリッヒ大会には案内を受けながら参加できず残念だったので、今回は喜んで承諾し、去年九月十八日夜、ルフトハンザ機で成田を発った。

今回の大会で文学部会の部長(Convent)をつとめ、私を招待講演者に推薦してくれたメラノウィッチ教授(ワルシャワ大、本館報第六号拙文参照)と偶然同じ飛行機で行けたのも幸運であった。機内で私は、部会で座長をとめる氏に、私の講演草稿を一応下見して貰った。

二十日から二十二日までの三日間

の大塚(大塚)は『The Japan Foundation Newsletter vol. VII/No4(Oct-Nov, 1979)』に地元担当者(local organizer)として夫人ともども絶大な貢献をされたマライニーニ教授(フィレンツェ大)の詳しい報告があり、文学部会のことは拙文「欧米の日本文学研究管見」(『文学・語学』第八十七号)にも書いたし、久保田淳氏も『国文学』(昭五五・二)の「学界時評」に言及しておられるので、大要はそれらに譲り、二、三の補足にとどめる。大会が行われたのは、フィレンツェ中央駅近くの公園の中にある、Palazzo dei Congressi (=Palace of Congresses) という建物で、入ったことはないが日比谷の市政会館などに当るものかも知れない。地上三階地下一階、地下はバー(セルフサービスの喫茶)その他で一・二階は小部屋、三階は客席五、六百余りかと思われるやや横長のホールで、全体として虎ノ門の教育会館を一回り小さくした建物と思えばよい。開会式・閉会式は三階のホールで行われ、部会は一・二階の小部屋に椅子を数十脚ずつ入れて行われた。部会は六つで、それぞれの招待講演者の名を付して挙げれば、歴史(学習院大、安井達弥氏、滯英中)、言語(国

立国語研究所、水谷修氏)、文学(福田)、宗教・哲学(明治大、圭室文男氏)、社会(明治大、蒲生正男氏)、芸術・音楽(東京国立文化財研究所、



久野健氏)の六である。別稿にも書いたように、地元イタリアやイギリス・西ドイツはもちろん、当館の国際集会でもなじみのリディン教授(コペンハーゲン大)以下北欧勢や東ベルリン・ユーゴスラヴィア・ルーマニアなど東欧からの参加者もあり、多彩な顔ぶれであった。昨年四月から一年間交換教授でポツムに行っている久保田淳氏とその家族に会えたのも、私としては嬉しかった。家族は私に会うとすぐ観光に行かれたが、氏とポツムから同道された青柳氏(東大、比較文学)とは文学部

会に二日目の午前まで参加しておられ、私の話もじっと聞いておられたのは閉口したが、二日目の最後のオープン・ディスカッションの折こそ日本の学者として何か言ってほしいかったのに、おられなくて残念であった。

と言うのは、「とはずがたり」にふれた私の話などを契機として、日本人の「日記好き」と時代劇・時代小説好きが話題になったのである。ヨーロッパの学者の言うところでは、日本人は例えば兵隊が陣中でも背囊に日記帳を入れていたように日記をつける習性が高いそうで、また時代劇・時代小説が大衆に人気のあるのも日本の特性だと言う。日曜夜のNHKの大河ドラマのことも話題になり、当時やっていた「草燃える」のことも、メラノヴィッチ氏ほか何人もが知っていた。私としては、そうした指摘は初耳なので、示唆としてよく考えてみたいと応答したのである。

町全体が美術館と言われるフィレンツェで、時間に余裕のあった第一日と第三日の午前に行くつかの美術館や遺蹟を訪ねたが、ウフィッチ美術館、特に有名なポッティチェリの

室は圧巻であった。晴れたフィレンツェの町は歩くコートと靴を脱いで汗をかき位であった。それが帰途寄った小雨のヴェネツィアでは手が冷たく、ベルリンでは柏(英語名Ginkgo)が黄ばんでいて、同じ九月までも北へ行くほど秋の深いのを味わった。

大雨のローマや交通ストのミラノでホテルへ来て下さったストラミジョリー教授やヴァロータ教授との日本語でのインタヴューやローマ日本文化会館のこと、ヴェネツィアの駅へ見送って豪華なイタリア式駅弁を差入れて下さったボスカロ教授とメルロ君の親切、第一回国際集会に新潟から参加して茶道の腕前を見せたボックホルト君とミュンヘン大学で、また四年前に訪ねてその後資料館にも来られたクラフト女史と西ベルリン国立図書館で、それぞれ再会し、これも日本語で親切な案内・説明を受けたことなども書きたいが、すでに紙数が尽きた。ただ、当館の国際集会や『文献目録』(近年は『年鑑』)が各地で大いに役立つのを知って大変嬉しかったことを付言しておく。往きと同じくアンカレッジ経由のルフートハンザ機で台風模様の成田空港に帰着したのは九月三十日の午後であった。

う。また、計算機による処理と手作業とが、相互の特色を生かして結合されていた。手作業をも含めたシステム分析が為された結果であろう。

訪問した当時、ISIは新ビルに移転後10日を経たばかりであったが、混乱もなく着々仕事が進んでいる様子に見受けられた。新ビルは4階建ての四角な広い建物で、各階に部屋を区切る壁がないのが特色である。階全体が巨大な部屋で、必要に応じて仕事場を区切るパネルを置く方式が採られている。日本でも最近の電子計算機センターは、この方式を採用することが多い。この方式の利点は、ある部所がより広い場所を必要とした時、流れ作業の効率を最大にしたまま再配置することが容易なことである。ここで言う「容易」とは、再配置の経費が安く済むことも含んでいる。いかにも効率、発展性を重んじるビジネス感覚あふれる方式と言えよう。

OCLC Inc.(旧称Ohio College Library Center)



OCLCはオハイオ州コロンバスにある図書館ネットワーク企業である。Kilgour所長の御尽力により、Kaske博士からまる一日説明を聞き、見学することができた。筆者は76年の夏既に一度訪問したことがあるが、今回はその時とかなり様子が変わったとの印象を受けた。総じて発展中の企業に関しては、数年前の印象をもとにして発言することは危険なようである。

著名な経営コンサルタント会社Author D.Littleの勧告を受け、以下に示す企業組織強化策を実施したとのことであった。社名をOCLC Inc.に改称(77年12月)、役員を9名から15名とし、実業界の人を加えた。OHIONET(オハイオ州の図書館グループ)の設立。ユーザー協議会の設置。これらは、オハイオ州の大学図書館共同のサービスセンターとして出発したOCLCが、今や米国全州の図書館を顧客とする独立の巨大企業(端末数は3000に近いという)となったことを示している。

OHIONET、AMIGOS、NELINET等々のネットワークは、図書館のグループで、苦情処理、教育等の事

業を行う組織であり、OCLCを本社とすれば代理店と言えよう。OCLCは以下の6部から成り、その構成員概数は()内に示すとおりである。総務部(40)、経理部(30)、計算機部(120)、図書館システム部(30)、研究開発部(50)、営業部(40)といった、計算機センター的構成である。

OCLCは急激に増大する端末に対し、短い応答時間での処理を保証するためのハード、ソフトの改良を行っている。77年10月に旧来のシグマのディスクを新しいTandemのデータベースプロセッサに置き換えることを決定した。シグマの計算機本体部分を残した理由はハード、ソフト、プログラム書き換え等のコストを考えてのことのようである。これ以外に回線側のミニコンを増強するなど、最新の技術をもって対応しているが、3000端末を相手とするのは容易ではない。UTLASやRLIN等他のネットワークに比べ、桁違いに顧客が多い巨大企業ならではの苦勞と言えよう。

終りに

与えられた紙面も尽きてきたので、他の機関や学会については別の機会に触れるとし、最後に印象を二点述べることにしたい。

訪問した機関でも、出席した学会でも、各自が自分自身の意見を持ち、それを主張する点は印象的であった。実に多様な意見分布がある。それ故、たまたま会った人の意見のみを聞いてそれを統一見解と思うことは危険で、立場の異なる人の意見を合わせ聞いて判断することが必要と言えよう。

また、ソフトウェアはその廻りの環境と一体となって、「真のシステム」たり得るとの印象を持った。特に効率的なソフトウェアほど環境との関係が密であろう。欧米と日本では環境は大きく異なる。日本でも企業においては欧米化が進んでいるものの、国公立機関では事情が異なる。人事管理、予算の組み方、人の性質等、根本的な違いのある所に、欧米のソフトウェアの直輸入は良い結果は生まないであろう。日本人の特質を生かした「真のシステム」の開発が望まれる。自動車の本場の米国にあれだけの量の車を輸出する日本、巨大なIBMに未だ負かされていない日本であるから、情報の分野でも道は明るいと思える。

最後に、お世話になった関係者各位に深く御礼申し上げます。また、米大陸を訪れた際、一部御同行のうえ御教示いただいた根岸正光東大講師に感謝致します。

—— 海外出張報告 ——

情報の蓄積・検索システム見聞記

石塚 英弘*

昨年9月14日から2ヶ月間、筆者は幸いにも在外研究の機会を与えられ、米英を中心として情報図書館学の学会出席、そして関連諸機関見学を行うことができた。学会講演のみから研究の詳細を知ることは不可能であるし、見学で知り得ることには必ずから限度がある。真の理解を得るためには、1・2年仕事を共にするのが最良であろうが、限られた期間で片寄りのない新知見を得るには、学会出席と機関見学は適切な方策と言えよう。

各所において貴重な知見が得られたが、紙面の都合上以下に述べる事に限って印象に残った点を記し、他の機関並びに学会については別の機会に述べることにしたい。

米国議会図書館(The Library of Congress、以下LCと略記)

ワシントン特別区にあるLCでは、Agenbroad氏(昨年6月資料館に來館)とPollet女史の御尽力により、計算機を導入している業務について各担当者の方々から説明を受けることができた。テーマは、APIF(Automated Process Information File)、MUMS(Multiple Use MARC System)、LC Authority System、CONSER(Conversion of Serials)等である。概してこの種の略号で呼ばれるシステムは、名前だけでは実態がわからないようになってきている。これは、命名の基礎を機能あるいは対象ファイルに置く等一定しないうえに、魅力的な名前を付けようとするからである。その結果、名前の異なるシステムが実は同じプログラムで動いていることさえある。

APIFはMARCファイルの原稿と言えらる。MUMSはファイルをオンラインで処理するソフトウェアであり、APIFの入力・校正に用いられている。LC Authority SystemはLCのAuthority Fileの検索システムであるが、未だ保有分の一部(最近LCに納められた本に基づくもの)しかオンラインディスク上にはない。以前の蓄積分はオンライン化の計画はあるが、今のところカード状態のままである。

* 国文学研究資料館研究情報部情報処理室

本がLCに到着してから実際にMARCレコードが作成されるまでの業務を見学することができた。端末からはMUMS、LC Authority System、さらにカードのAuthority File、これらを駆使してテキパキと片付けていく仕事ぶりは印象的であった。年間20万件を超える出版物に対し遅れなくMARCレコードを作成することが、全国の図書館から期待されていること、人手で処理し得る限度を著実に超えつつある大量のAuthority Fileのカード、これらが計算機導入による合理化を余儀なくさせているのであろう。

CONSERはOCLCのシステムを使って行なわれており、LCは他の図書館が入力したデータの検査を行っている。この種の共同利用目録作成では、レコード間の矛盾、重複の除去をいかに行うかが鍵である。システム的には、LCのカード番号ではなくシステムのレコード同定番号が管理番号として役に立ったこと、またLCに現物がない場合は表紙のゼロックスコピーを送ってもらい検査する等の指摘があった。これらの点は、東大の情報図書館学研究センターを中心として実施中の、学術雑誌総合目録の作業でも既に認識されていることであり、興味深かった。

Institute for Scientific Information(ISI)

ISIは論文タイトル速報紙(商品名Current Contents以下CCと略記)と引用索引付きデータベースを作成していることで著名な情報サービス企業で、フィラデルフィアに本社がある。ISIに到着した雑誌は全て、10日以内に印刷が完了し週刊のCCとして発送されており、このことがISIの最大のセールスポイントとなっている。これは情報の「速さ」、それ自体が価値であるということが、既に一般にも広く認識されていることを示すと言える。

営業部門の長Hoffman女史から説明を受け、「速さ」の秘訣は業務の徹底した合理化にあることを知った。個々の手法は実に単純で実際的であるが、それらは「速さ」を目的に設定され、いかにして無駄を省くかを考えて組み合わせられているところに秘訣があると言えよ

* * 逐次刊行物の共同利用目録オンライン作成プロジェクト

文献資料部事業報告

大久保 正

当部において収集計画委員・文献資料調査員の協力を得て行なった調査は、一月三十一日現在で、調査箇所三十九カ所、調査点数五、一六三九点、また収集は、二月四日現在で収集箇所三十カ所、調査点数五、六九九点で、収集はほぼ完了したが、調査は、調査カード未着で今後到着予定分を含まない数である。

次に昭和五十四年七月一日以降、一月末日までに当部で行なった事業の概要を報告する。

近畿地区文献資料調査員会議の開催
七月七日、京都市北区衣笠北天神森町京都農林年金会館会議室において開催、当部から伊井が出席した。近畿地区を中心とする今年度の調査収集計画、特に陽明文庫の調査方法について協議し、陽明文庫調査の方針を決定した。また、今後の調査対象についても意見を交換した。
北海道・東北地区文献資料調査員会議の開催

十月三十一日、青森市中央二丁目八甲荘において開催、当部から福田が出席した。北海道・東北地区調査の反省と今後の見通しと、同地区未着手図書館文庫等の今後の展望について協議した。具体的に十余りの文庫・個人等について情報を交換、有益であった。調査員側から、五月はもっとも調査に出張しやすいので、五月から調査できるように考慮できないものか、また調査員交替後の相互の連絡について考慮してほしいなどの要望があった。
中部地区文献資料調査員会議の開催
十二月十一日、名古屋市東区赤荻町愛知会館において開催、当部から渡辺が出席した。
中部地区調査の反省と今後の見通しについては、各調査員から、効率のよい共同調査の実施、各調査員の子定の明示、補助者同行の促進等について要望が出た。また昭和五十五年度から実施予定の新調査カードに

新収資料紹介⑫

飛鳥井雅豊手沢本万葉類葉抄

万葉類葉抄は中御門宜胤（大永五年一五二五没、八十四歳）が、延徳三年一四九一、後土御門天皇の勅命によつて万葉集各巻の歌を天象・時節・地儀・居所・諸国・飛禽・走獸・昆虫・龍魚・甲虫・人倫上・人倫下・人体・衣服・飲食・器財等に部類したもので、本書各冊の奥に「延徳三年依 勅命部類之、権大納言藤原宜胤と見え、「宜胤卿記」文龜元年一五〇一の条にも「今日類葉抄一卷^{萬葉集}借遣、桃井佐御所望也、比抄ハ依依勅令即万葉所部類也」と見えている。使用した万葉集は仙覚の新点本で、本文は漢字交り平仮名で記し、抄出が主であるが、簡単な注釈もあり、仙覚抄・詞林采葉抄・万葉目安の影響下にある。

本書には完本が存在せず、十八巻のうち第九・十・十一・十二、及び第十六の五巻を缺いたまま伝来したと覚しく、新収の飛鳥井雅豊本もまた同様で、全部十三冊、第八冊目を「第八之十二」としたのは、もとの第八巻をさらに五部に分けることにより、その破綻を隠そうとした処置と考えられる。

本書の開巻が何であったかは、早くから今井似閑・入江昌喜等の学者が欠巻の推定を試み、入江昌喜は、名所部・神祇部・言詞部と推定して「万葉類葉抄補闕」を著した。

本書は上述の如く権中納言飛鳥井雅豊（正徳二年没、四十九歳）の手沢本で、巻首に「雅豊」の丸陽刻印が押してあり、正徳二年一七二二にかなり先立つ江戸前期か中期に書写され、雅豊に蔵せられていた本と認められ、すこぶる美本で、保存も極めてよく、本書の重要な伝本として注目される。以下簡単に書誌を記しておく。

二七・七センチ×二〇・二センチ、砥の子色布目地三色墨流し紙表紙。左上に「類葉抄一天象部」一十八器財部」と外題、袋綴、本文用紙は薄葉。一面十二行。墨付（六七丁）（八一丁）（一一四丁）（四四〇丁）（五二六丁）（四八丁）（三八丁）（八之十二）（五〇丁）（七〇丁）（六〇丁）（五二丁）（四欠）（三丁）（六〇丁）。「雅豊」のほか「岡田真」の印記がある。桐塗箱入。

（大久保正）

ついても種々の質問や意見が出た。

昭和五十四年度文献資料調査収集の概況

一、調査

本年度当部が文献資料調査員の協力を得て調査を行なった図書館・文庫等は概ね左の如くである。

- 北海道・東北地区 函館市立図書館・青森県立図書館・弘前市立図書館・秋田県立秋田図書館・会津若松市立会津図書館・うもれ木文庫
- 関東地区 彰考館・前橋市立図書館・駒沢大学図書館・内閣文庫・東京芸術大学附属図書館・船橋市立図書館・中田剛直氏
- 中部地区 富山県立図書館・金沢市立図書館・武生市立図書館・八幡神社・明通寺・大野高等学校・朝日町郷土資料館・愛知教育大学・鶴舞中央図書館・西尾市立図書館(岩瀬文庫)・徳川美術館・神宮文庫・射和文庫
- 近畿地区 陽明文庫・京都女子大学附属図書館・大阪大学附属図書館・大和文華館・高田郷土文庫
- 中国四国地区 島根大学附属図書館・愛媛大学図書館
- 九州地区 宮崎県立総合博物館・都城市立図書館・杉田正臣氏・押方重信氏・黒木忍氏

海外 ハーバード・エンチン図書館・エール大学東アジア図書館

二、収集

昭和五十四年度、当部が調査員の協力を得て収集した(進行中のものを含む)マイクロフィルム資料の概況は左の如くである。

- 1、八戸市立図書館 古今和歌集 ほか三二八点。 三二八。
- 2、宮城県図書館 土御門院御集 ほか二六四点。
- 3、斎藤報恩会 伊達家蔵書目録 ほか二九九点。
- 4、うもれ木文庫 貫之集ほか五八点。
- 5、国立国会図書館 連歌合集ほか七七六点。
- 6、宮内庁書俊部 拾遺集ほか一六八点。
- 7、東京芸術大学図書館 華流小鼓法格秘事ほか三二六六。
- 8、彰考館 阿野本万葉集ほか一六二点。
- 9、中田剛直氏 伊勢物語ほか七九点。
- 10、静岡県立中央図書館 改選諸家系譜ほか三二六六。
- 11、鶴舞中央図書館 岩淵夜話ほか一〇〇点。
- 12、岐阜大学附属図書館 後撰和歌集標注提要ほか四七一点。
- 13、東海学園女子短期大学 新勅撰和歌集ほか八八点。
- 14、神宮文庫 古今和歌六帖ほか一〇〇点。
- 15、刈谷市立図書館 新撰国字蒙求ほか三〇一点。
- 16、朝日町郷土資料館ほか 桃井家由緒書ほか五七点。
- 17、大阪市立大学図書館(森文庫) 荷田春満大人歌拔書ほか五八九点。
- 18、陽明文庫 宇津保物語ほか一三四点。
- 19、高田郷土文庫 はちかづきほか六六。
- 20、逸翁美術館 佐竹本三十六歌
- 21、仙切(高光) ほか一五八一点。
- 21、中村幸彦氏 英草紙ほか一七六。
- 22、河野記念文化館 古筆手鑑『蒙叢』ほか一〇一点。
- 23、高知県立図書館 秘府図書目録ほか一〇〇点。
- 24、佐賀県立図書館 詩林良材ほか三六〇点。
- 25、エール大学(海外資料) 伊勢物語一点。
- 26、東京大学附属図書館既成マイクロフイツシユ(竹冷・知十文庫) 一六三三。
- 27、その他 八二。

計 五九九九点。(文献資料部長)

研究事業部事業報告

古川 清彦

昭和五十四年度の下半期において、は第三回国際日本文学研究会の開催が関係方面の御協力を得て無事終了した。また臨時事業として昭和三十七年以前の研究文献の調査・収集が進捗し、その論文目録作成システ

ム及び年鑑作成システムの開発が着手された。資料管理システムの増強も計られた。以下各室毎に情況を報告する。

(1)情報室。昭和五十四年十一月十五・十六の両日、別稿のように第三回

国際日本文学研究会を開催し、その会議録を発行した。

また今年度から五カ年計画の臨時事業として開始された昭和三十七年以前の国文学研究文献の調査・収集・目録刊行事業については、第一次調査として、全国的な三十五学会にバックナンバーの在庫の有無と入手方法を照会し、各学会の御協力によりそれぞれ入手を完了することができた。また第二次の調査として国文学関係学科等をもつ大学・短大に、紀要・学内学会誌等六九五件について照会し、各機関の多大な御協力により、現在までに約二〇〇冊のバックナンバー（昭和三十八年以降の欠号分を含む）を新たに収集することができた。各大学等にも在庫のないものについては、複写の許可をいただいているので、整理閲覧室に依頼し、複写による収集も進めている。

新聞情報については「国文学年鑑」用に記事を整理するほか、参考室の協力により、気軽に館内で利用できるように準備を進めている。

(2) 編集室。昭和五十三年分「国文学年鑑」は三月末刊行をめざし編集集中である。近年、研究論文は増加の一途をたどり、例年二〇頁前後の増となるが、本年度も雑誌論文を例にと

ると五十二年一六三頁、五十三年一七六頁と二三頁の増である。また「国文学研究資料館紀要」六号は七篇の論文及び資料を取めて、三月末刊行の予定である。年鑑及び紀要は市販されるので入手は簡単である。

(3) 情報処理室。「マイクログ資料目録」一九七九年版は、すでに三冊目なので各作業も円滑に進み、昨年よりかなり早く、一月中旬に版下の打出しを行った。

「逐次刊行物目録」の作成システムは作業が遅れているわけではないが、できるだけ最近の収集雑誌のデータまで収録するために、年度一ぱいに刊行の予定である。

これらの目録作成の必要のため、今年度新たにJIS外漢字五〇字のフォントを作成し当館漢字システムに登録した。

また、このような漢字管理を効率化するために、異体字関係、関連字指示を有する辞書、いわゆる漢字シンラスを科研費により作成した。

研究文献目録の入力は昨年を引きつづき、昭和四十三、四十二、四十一年に遡って入力し、また新しい方では五十年分を入力している。

新システムの開発では、データベース・マネージメント・システム、

昭和三十七年以前目録作成システム、語彙索引システムについて、それぞれ設計を終り、作成に着手している。なお高橋きよ事務官は十二月三十一日付で辞職した。(研究情報部長)

新収資料紹介 ⑬

住吉物語 奈良絵本三冊

源氏物語や枕草子に古物語「住吉」の名が登場し、王朝時代からの継子譚の物語とされる住吉物語は、中世に入って改作され、お伽草子化の道を進む。改作以前の古物語は散佚して伝わらないが、擬古物語の改変風潮の洗礼を受けた室町期以降の伝本は多く、種々の系統に分類されている。

伝本の発掘は今後も続こうが、昨夏の「おとぎ草子・奈良絵本」展(サントリー美術館、思文閣美術館)では、つねに著名な室町期の絵巻二巻(赤木文庫蔵)とならんで、大型三冊本 室町後期、横長型三冊本(江戸前期)が、海外からの大型三冊本(江戸前期、チェスター・ビーツイ図書館)とともに展示紹介されていた。当館本も新伝本として紹介しよう。

書誌。大型奈良絵本三冊。書写時、江戸前期は降らない。縦二八・九センチ、横二三・八センチ。通常の大型本より、天地はやや短かい。改装本で、紺地に金泥砂子、金切箔散らし文様の原表紙(各冊ともに破損)に、後補の楮紙を貼付し、その中央に「住吉物かたり上(中下)」と能筆にて墨書。紙数は、上冊二四枚、中冊二三枚、下冊二五枚(各冊ともに首遊紙一枚が付く)。絵数は、上冊七面(第六、七絵は見開き絵、写真参照)、中冊六面、下冊八面。絵相は、よく見つける画一的にして没個性のものだが、割とよく、絵具の剥す。絵画の保存は割とよく、絵具の剥落は少ない。

本文や趣向構成は、瞥見の限り、略本系統のもので、例えば吉野弘隆旧蔵本(国会図書館蔵)などの系列である。和歌の所収状況や歌詞を検すると、慶長元和頃刊の古活字十行本(内閣文庫蔵)に最も近い。ただ、古活字本所収和歌の三、四首が非在で、また例えば「絶はてむ云々」の歌が「の給いてなきこそはかなしきにくる山人のたより思へは」と変容しており、その伝承内容や書承経路は単純ではない。(徳田 和夫)

整理閲覧部

本田 康雄

新発足した部として、収集された資料の受入・整理、特にマイクロ資料についての書誌調査および電算機入力蓄積のためのデータ作成について検討し、質的向上、効率化を計った。また閲覧・複写サービスと緊密に連絡しつつ、参考調査サービス、利用者援助の徹底化に努めた。国文学普及のため公開講演会、展示を行った。利用者の要望を検討し、また図書資料委員会の庶務担当部として館の利用面、資料保存などについて審議した。

(一)整理閲覧室。本年度は開館以来三年目に入った。閲覧部門のサービスも順調に伸びつつある。しかし、サービスの中味の検討あるいはサービス業務の基礎となっている整理作業のあり方についてもさらに充実すべきであるとして、新しい企画をいくつか開始した。とくに文献資料の整理でいえば、例年より早く、かつ多くマイクロ資料を整理し、すでに「マイクロ資料目録一九七九」(九、三四点所収)は版下まで完成、他方①マイクロ資料だけではなく当館で所蔵

している原本も機械可読目録にすべく、そのデータづくり②昨年の実験にひきつづき、著者名典拠ファイル作成作業の業務化③マイクロ資料の新整理基準の検討など進展している。以下、業務別に主な事業項目をとり上げてみる。

(1)受入業務。研究情報部との協力で昭和三十七年以前の国語国文学分野の文献目録作成のため、逐次刊行物の収集にあたった。そのために年度末に作成する逐次刊行物目録もかなり収録誌を増すであろう。

(2)整理業務。右に述べた文献資料整理のほか、当館収集の新刊書(『基本参考図書』)の整理のスピードアップを図った。また、昭和四十九年度に東大図書館から移管された複本(版本約二二、〇〇〇冊)のうち、破損本の補修を昭和五十二年度から三年次計画で行ってきたが今年度で終了した。「マイクロ資料目録縮刷版」の市販を始めた。

(3)閲覧・複写業務。増加した紙焼写真本の開架によって、さらに多く利用者を獲得しているが、逐次刊行物

利用者へのお知らせ

『マイクロ資料目録』の統一書名(見出し項目)について

当館の「マイクロ資料目録」をもとに原資料所蔵機関に問い合わせる場合、次のような点に注意して下さい。

『マイクロ資料目録』は「国書総目録」に準拠しながら、統一書名(見出し項目)を決定しています。又「国書総目録」に収載されていない資料については、定評のあるその他の目録や図書に記載されている書名を参考にしたりえ当館で独自に統一書名(見出し項目)を決定しています。

一方、原資料の所蔵機関においても当然のことながら、その機関の状況に合わせて目録作業を行っております。

『国書総目録』収載分については、当館での目録作成の際に調整していただきますからそれほど問題はありますが、収載されていない資料で、特に合綴書などでは、作品単位の認定に目録作成機関の整理基準が反映する関係上、不一致が生じ易くなります。

従って「マイクロ資料目録」上の統一書名(見出し項目)を以て原資料所蔵機関に問い合わせるような場合にはこの点に留意していただきたいと思えます。

なお「マイクロ資料目録」には原資料所蔵機関で用いられている函架番号を採録してある場合もありますので参照して下さい。

「彰考館」のマイクロ資料の利用について

従来は館内閲覧のみに限定されていましたが「彰考館」のマイクロ資料は、このたびそれに加え、紙焼写真本の複製及び館外一夜貸しが認められることになりました。国文学研究の便宜の拡大のために学術研究者に限って取られた措置で、当館のサービス向上の一助ともなり歓迎すべきことです。

周知のように、当館が撮影収集したマイクロ資料の利用は、原資料所蔵機関との申し合せに基づいています。今後共各所蔵機関との相互理解を深め、協力をおおきながら、サービス向上に努めたいと思います。

についても利用頻度の高い十一誌のバックナンバーを全開架することによって好評を博している。また図書資料管理システムにバックアップおよびジャーナルの機能がつけられ、統計など業務分析用にむける。また、システムの一部改善により処理速度が増した。

複写件数は、カウンター受付、相互利用ともに順調な伸びを している。円滑な複写サービスを進めてゆくために、原資料所蔵者との連絡体制や著作権に伴なう問題なども整備されつつある。今後のサービス方針ともからみ、閲覧室の設備等の見直し作業に着手した。

(二)参考室。参考図書増加に伴ない参考開架閲覧室を拡大して書架を増設すると共に、レファレンス・カウンターを同室中央に再配置した。同時に、利用の便をはかるため開架図書の種類・配置換え、書庫からの再選定等を行った。参考用資料の作成に關しては、『館蔵活字本謡曲曲名索引』(九三頁。部内資料)を印刷し、『漢籍類書項目索引』(作業中)、『影印本・翻刻類書目索引』(仮題、作業中)等の作成に従事している。

国文学の普及業務として、①講演会は、九月に三日間に亘り、第二回

夏期連続公開講演会「日本の説話―ハナシの世界」を開催した。演題および講師は左記の通りである。

六日(木) 一時三十分より、「湘南の海竜女」 専修大学教授 今野達氏、「説話文学研究の問題点」清泉女子大学教授 西尾光一氏

七日(金) 同。八間川の男と長明」 当館文献資料部 村上学助教、西鶴と近世説話」 龍谷大学教授 宗政五十緒氏

八日(土) 同。「狂歌咄の伝承」 東洋大学教授 大島建彦氏、「古代の羽衣」 武蔵大学教授 神田秀夫氏

(なおこの講演は、『国文学研究資料館講演集』として活字化、本年三月に刊行の予定である)。また通常の公開講演会は第十一回をむかえ、「歌舞伎」をテーマとして十一月十七日(土)一時三十分より、「歌舞伎の世界と趣向」 国立劇場芸能調査室専門員 服部幸雄氏、「男の世界・女の世界―近世戯曲の構造をめぐって―」 立教大学教授 松崎仁氏を開催、盛況であった。②展示は常設展示「日本の絵本ならびに版本の挿絵」(八月二十八日―十一月十七日)、特別展示「日本の絵本ならびに版本の挿絵」(八月二十日―二十五日)―この展示目録は『国文学研究資料館特別展示目録四』

として刊行した、「和歌と歌論―初雁 文庫・久松博士本を中心に―」十一月二十六日―十二月一日)を開催した。(整理閲覧部長)

新収資料紹介 ⑭ 寛永行幸記 三巻

原装(藍漬染紙)原題(寛)御行幸之次第上(中下)子持匡郭。天地29・2種、横幅上12米51種(本文二十九紙)中7米96種(本文十八紙)下9米20種(本文二十一紙)・雲母引厚手楮紙(下第九紙のみ薄手楮紙、雲母引ナシ)。上下両巻の行幸図に手彩色あり。黄・朱・赤・緑・鶯紺青・茶・薄茶・肉・紫・胡粉・灰・鼠の十三色。

寛永行幸記は後水尾帝の寛永三年九月六日二条城行幸の次第を画いた行列絵巻(上下巻)行幸次第・催し・歌会等の事を誌した部分(中巻)から成る。古活字版に第一種・第二種(イ)(ロ)の計三種が存する。他に真名古活字本が存するが、別種の作品とすべきである。

当館新収のものは右の第二種本を覆刻した整版本である。旧蔵者により、この本も古活字なる事を力説した紙葉が添えられているが誤りである。ただし、覆刻本とはいえ、丁寧な手彩色いい、保存の良さといい、これはこれで価値を有するものである。

付載写真は「古活字版之研究」図録五七九・五九八図に対応する個所である。茶の汚が「ひろはし大納言」の左下に僅かにある。(村上 学)



共同研究

昭和五十二年度から実施された共同研究は、五十三年度に共同研究委員会が設置され、共同研究にかかる基本事項(テーマ・共同研究委員)を審議するようになった。

共同研究の実施は委嘱された館内・館外の共同研究員が行うのであるが、五十二年度以降国文学文献資料の解題の理論と実際を当面のテーマとして、今日に及んでいる。

初年度は当館で行う国文学文献資料の解題の基本姿勢や方針を討議し、その実践例として当時当館に寄託の初雁文庫本(古今集以下中古、中世の歌書、物語を主とし、五十三年度に当館が購入)の解題を試みることを決定して二年計画で実行に当たった。五十三年度はそのメンバーを初雁班と仮称、写本に絞ることとした。同年度からは版本の解題について原理と実際に当る班も発足、俳書に目標を絞り、種々の実験を試み、俳書班と仮稱した。五十四年度は初雁班は事業を整備、あらたに二年計画で久松国男氏寄託本(中古、中世の歌書を主とする)にとりくんだ、俳書班は第二年度、光丘図書館蔵の俳書に絞り解題の実際を行った。

評議員会議の開催

本年度第二回評議員会議が去る三月七日(金)午前十時三十分から当館中会議室において石井議長ほか十四名の評議員の出席を得て開催され、昭和五十五年度予算について、昭和五十四年度事業の中間報告及び昭和五十五年度事業計画の概要等について評議が行われた。

昭和五十四年度

文部省内地研究員
上杉省和(静岡大学助教授)

稲葉二柄(香川大学助教授)
昭和五十四年度国内研修員

川上富吉(大妻女子大学助教授)
昭和五十四年度大学院受託学生

筑波大学(近世文学) 一名
昭和五十四年度文部省在外研究員

石塚英弘(研究情報部)
五十四年九月十四日～五十四年十一月十三日

外国出張・海外研修旅行
福田秀一(文献資料部)

古川清彦(研究情報部)
五十四年九月十八日～九月三十日

五十四年九月二十八日～十月三日

国文学研究資料館紀要(第六号)

源氏物語を訳して―文体の問題……………	E・G・サイテンステッカー
抄出本「現存和歌六帖」(校本と索引)……………	福田 秀一
佐藤存夫の昭和十年代前期	
―「アジアの子」の周辺・付著作目録補遺……………	奥出 健
MARCフォーマットと書誌データ表現……………	宮澤 彰
MARC・UNIMARCの持つ意味……………	内藤 衛亮
漢字情報処理システムの課題	
―漢字セットの設計と運用システムについて……………	田嶋 一夫
明治期における文学基盤の変化の指標について……………	山中 光一

国際日本文学研究集會會議録(第三回)

PROCEEDINGS OF THE 3rd INTERNATIONAL CONFERENCE ON JAPANESE LITERATURE IN JAPAN(1979)

目次

あいさつ	市古貞次
スナップ集	
研究発表	
日本の近代文学と中国作家	鄭 清茂
戦前台湾における日本文学	張 良澤
―西川満を中心として―	
『夜半の寢覚』構造分析の小論	ケネス・リチャード
西洋人の歌舞伎史	中村哲郎
子規の勉年の短歌	ジャーニーン・バイチマン
『山の音』における「切り」と「合わせ」のテーマ	鶴田欣也
シンポジウム	
民間伝承(フォークロア)と文学	白田甚五郎
	三隅 治雄
	リチャード・マッキノン
記録編	
集會日程、研究修會の経過、参加者名簿、国際研究修會委員名簿	
(※連絡先: 国文学研究資料館情報室)	

昭和五十五年度春季学会開催一覽

情報室

国語国文学会連絡協議会に参加する学会の春季大会予定は次のとおりである。学会は五十音順、以下①事務局②大会開催日③会場。

- 解釈学会①千七百 豊島区北大塚三―二九―二教育出版センター内②夏
- 近代語学会①千五百 世田谷区太子堂一―七昭和女子大学内
- 国語学会①千二百 千代田区神田錦町三―一―武蔵野書院内②五月二―四
- 古事記学会①千五百 渋谷区東四―二〇
- 古代文学会①千三百 横浜市緑区奈良町一六六五町方和夫方(四月以降事務局変更)②月例会のみ
- 上代文学会①千二百 千代田区神田神保町三―二七共立女子大学芸学部
- 部日本文学研究室内②五月一―七日
- 一―九日③甲南女子大学
- 説話文学会①千二百 千代田区三番町
- 六二松学舎大学文学部国文学科

志研究室内②六月二九日③二松学舎大学

全国国語国文学会①千五百 世田谷区太子堂一―七昭和女子大学

本文学研究室内(六月以降専修大学に事務局移転)②六月七日―八日③昭和女子大学

中古文学会①千六百 神戸市東灘区森北町六―二―二三甲南女子大学文学部国文学研究室内②五月一―〇日

一―一日③学習院大学

中世文学会①千五百 世田谷区駒沢一―二三―一駒沢大学国文学研究室内②五月二―四日③駒沢大学

日本演劇学会①千六百 新宿区西早稲田一―六一―一早稲田大学演劇博物館内

日本歌謡学会①千五百 渋谷区東四―一〇―二八国学院大学文学部第三研究室内②五月一―〇日③武庫川女子大学

日本近世文学会①千五百 渋谷区渋谷四―四―二五青山学院大学三号楼野田研究室内②六月二―一日③二

日③青山学院大学

日本近代文学会①千六百 新宿区西早稲田一―六一―一早稲田大学教育学部②五月二―四日③早稲田大学大隈小講堂

日本口承文芸学会①千五百 渋谷区東四―一〇―二八国学院大学文学部第三研究室内②六月一日③広島大学

日本文学協会①千七百 豊島区南大塚二―一七―一〇日本文学協会②予定なし

日本文学風土学会①千五百 世田谷区太子堂一―七昭和女子大学日本文学研究室内②五月二―四日③昭和女子大学

日本文学研究会①千六百 仙台市川内東北大学文学部国語国文学研究室内②六月一―四日③東北大学文学部教育学部大講義室

俳文学会①千二百 八王子市東中野七四二中央大学文学部三八三三研究室内②予定なし

表現学会①千四百 二愛知郡長久手町大字長湫字片平九②五月一―七日③明治大学(校舎は未定)

仏教文学会①千三百 横浜市鶴見区鶴見二―一―三鶴見大学文学部日本文学科内②六月(予定)③花園大学(予定)

万葉学会①千六百 吹田市千里山東三―三―三五関西大学文学部国文学研究室内②予定なし

美夫君志会①千四百 名古屋市昭和区八事本町一〇―一二中京大学文学部国文学研究室内②未定③未定

和歌文学会①千二百 八王子市東中野七四二中央大学文学部長崎研究室内②予定なし

郵便番号、あて先、氏名を明記のうえ、郵送料(切手)を同封して当館情報室あてお申し込み下さい。

館報入手ご希望の方は

国文学研究資料館報 第十四号
昭和五十五年三月発行
編集・発行者
国文学研究資料館
東京都品川区豊町一―六一―〇
郵便番号一四二
電話(七八五)七三二(代)
印刷所 株式会社 三興